

排泄をめぐる幼児語の研究

— その 1 —

小林 良夫 (臨床心理学)

まえおき

報道によると、阪神大震災 (1995.1.7) で被災し、避難所生活をしておられた人々の要望のトップは入浴、次いでトイレであり、また、総理府 (1979) が行った「私たちが体験しうる快感調査」¹⁾の結果は、a 性的快感、b かゆいところをかくときの快感、c こらえていた排泄物を放出する時の快感の順だったという。

このように、排泄に対するわれわれの欲求は強い。しかも、それは快食、快眠、快便のたとえにみられるように健康のバロメーターでさえある。

そんなことから、排泄の習慣づけは幼児期における発達課題として位置づけられ、日々保育の場でも実践されているのであるが、これらに関するデータは少なく、また、筆者の講義においてもわかりきったこと、汚いなどの理由から表層的だった憾があるのではなにかせねばと思っていたとき、たまたま排尿を促すために発する音声はなぜシーシーなのか、などについての解明を求められていたので、排泄物に関する呼称など排泄をめぐる用語の

実態を調査することにした。

その結果、これら用語は女性語と関係があるらしいこと、時代を追うごとに美化されてきていること、食べることに対する研究に比べて少ないことなどが知られたので、保育の実際にいささかなりとも役立てばと思い報告することにした。

なお、語源や語義の解明にあたっては極力出典の明示に努めたが、推測の域を出ないものもある。明示あるいは訂正に役立つ資料があれば是非御教示賜りたい。

1. 排泄について

排泄とは、生物が物質代謝の結果生じる不用、または有害な生成物を体外に出す作用をいう。この場合呼気中の二酸化炭素は通常除外されている。(広辞苑)

このような経過を経て排泄された物質を排泄物といい、それは便、糞尿などと呼ばれているのであるが、その呼称は時代、地域によって異なるなどきわめて多様である。その主なものを表記すると第1表のようである。

では、これらの用語はいつころから、どこ

第1表 排泄物の呼称

便・糞尿	}	大 便……糞 (屎, 屎)、たいべん、大用、大解、ばば、うんこ、うんち
		小 便……尿、便液、ゆばり、いばり、しし、しと、小解、小用、(お) 小水、(お) しっこ、しーしー、(お) ちっこ

で、どのように用いられていたのでしょうか。

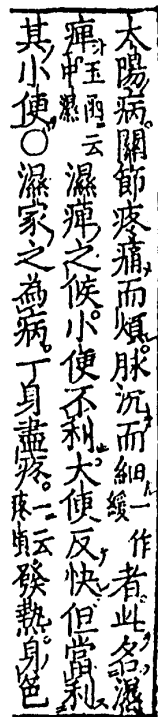
2. 便とは

辞書によると、便(便)とは人と便(おさめる)の合字で、細かい事を処理する召使いの意、ひいてはつごうがよいの意。(漢和中辞典) また、それが通じると気持ちが良い。安らかになるなどのことから大・小便を表す。(大漢語林) とある。

大・小便の文字が文献に現れたのは、宋(421~478)の時代に校訂されたといわれる「金匱要略」(第1回参照)で、文中に「湿痺之候。小便不利。大便反快。但当利其小便」…湿痺という症状は、小便の方が出にくくて大便の方がかえって出る。だから小便が出るようにしなければいけない……と記されている。

では、わが国の場合はどうであろうか。このことを大便と小便に分けて考えてみる。

第1回 金匱要略



注：医学博士 古田富久氏提供にかかる北里研究所 付属東洋医学総合研究所長 大塚泰男「金匱要略解説9」より転載。

3. 大便とは

大便とは、肛門から排出される食物のかすで、たいべん、大用、くそ、糞などといわれたり、表記されたりしている。

その大便の形成過程を「トイレは笑う」²⁾より摘記すると、胃に集められた食物はここで碎かれ、胃液と混ぜ合わされて1~3時間後に小腸に送られる。小腸の入口で胆汁や膵液の混入を得てスープ状になる。さらにそれは胃液等の作用を得てぶどう糖とアミノ酸に分解され、小腸の壁から吸収される。残った物は約2時間程度小腸に止まって大腸に送られ、15時間ほど滞在する間に水分を吸収されつつ、水分の少ない固形物として肛門から押し出されることになる。ちなみに、現代日本人の1日の排出量は平均150gといわれている。

このようにして形成された大便が、くその名のもとにわが国の文献に現れたのは8世紀である。すなわち、古事記(712)に「離天照大御神之宮田之阿。埋其溝。亦其於聞看大菅之大殿。尿麻理散。」³⁾……天照大御神の宮田の阿を離ち、其溝を埋め、また其の大菅を聞看す大殿に尿麻理散らしき……とあり、また、日本書紀(720)に「復天照大神の新嘗しめす時を見て、則ち陰に新宮に放戻る」⁴⁾と記され、さらに万葉集(400~759)に「枳の棘原苺りそけ倉立てむ、尿遠くまれば櫛造る刀自」⁵⁾と詠まれているのである。

ちなみに、記紀に多く出ている尿の字は、「尾の省略形である戸と米の合字でくその意」と「漢和中辞典」にあるが、最近ほとんど使われていない。

これに比し、大便や糞の字は今も使われているが、日常的にはそれよりもうんこ、うんちの方が多く用いられている。その実態は第2表に見られる通りである。これは筆者が、平成6年7月、T女子短期大学幼児教育専攻の学生(1・2年生)284名を対象にして調査したものである。

第2表 大便の呼称

区 別	対幼児%	対同性%	対異性%
ウ ン チ	66	23	11
ウ ン コ	23	48	19
大 き い 方	3	8	7
トイレ(お手洗)	1	18	55
未 記 入	3		7

では、どうしてこのように大便の呼称が変化したのであろうか。その理由は、結局、複雑な社会を生きなくてはならない人間の英知によるといえる。すなわち、排泄は人の生存に欠かせない。しかし、その本体は尾籠の一語に尽きる。胆汁色素ゆえの色。蛋白質の分解による臭。えたいのしれない形。そのいずれをとっても第三者に不快の感情をいだかせるので、それを避けようとして用いられるようになったと考えられる。

とって、これが一朝一夕のうちに改められたものではない。それらのことを明らかにするため、その語源等について考えてみる。

うんこの語源であるが、広辞苑によると「うんこのウンはいきむ声、コは接尾語」とある。いうまでもなくうんこは話し言葉であって書き言葉ではない。したがって適切な漢字はない。しいていえばうんには“^ん”の字があてられようかと思う。接尾語のこは、親愛の情を示すときに使われる。例えば、岩手県の民謡「からめ節」にいう“べここ”や秋田県の「どんぱん節」に見られる“わらびこ”“米こ”がそれである。だから、いきむことによって排出されるものをうんこといひ、条件づけのための刺激語としてうんが用いられるようになったのであろう。

では、うんこの文字が文献に見られるようになったのはいつごろであろうか。手持ちの資料によると、それは150~60年前からといえる。すなわち、天保12年(1840)発行の「大晦日曙草紙」6編の下に「か、さん、うんこがしたくなった」という長男・長松の台詞が、また、天保6年(1834)の「柳の葉末」

に「けつをされ、うんこが中に入るやう」⁶⁾と記されているのである。

次に、最近とみに多用されるようになったうんちについて考えてみる。この言葉が聞かれるようになったのは、昭和26年以降のように思う。

参考までに、大便に関する幼児向けの絵本を列挙すると第3表のようである。

さてその語源であるが、うんについては既述した。それに続くちであるが、それは生まれたばかり、あるいは幼いを意味する稚のほかに、招く、するの丁寧語である致。また“おれんち”などのように自分の所有や所属を意味するちが、さらに、うんちょう(うんこしょう)がつまったうんちとも考えられるが、定説は見当たらない。いずれにしても、うんちの使用の歴史は浅い。

第3表 幼児用絵本

著 者	書 名	発行所	発行年
五味 太郎	みんな うんち	福音館書店	1977
梅田 俊作	がまんた がまんた うんちっち	岩波書店	1981
七尾 純	すっきり うんち	あかね書房	1984
角野 栄子	ぞうさんの うんち	ポプラ社	1986
木村 裕一	ひとりで うんち	偕成社	198?

このように見るとうんこやうんちの言葉、特にうんちは、健康管理上極めて重要な排泄の円滑化を図るため、その前提となる大便の実態を損わない範囲で抽象・美化し、当人たちの不快に伴う抵抗を少なくしようと努めてきた保育者たちの努力の結晶といえる。

伊藤比呂美氏もその著「良いおっぱい 悪いおっぱい」の中で「アカンボのうんちは、絶対にうんこと呼ぶべきではないのです。うんちと親しくなれる、人のうんちしているところ、人のうんちそのものをまじまじと観察できる、できるどころかさわれる、これは子育ての醍醐味といえます」と喝破しているのである。

次に、小便について考えてみる。

小便とは、血液中の老廃物が腎臓で濾過され、水分とともに体外に排泄されたもので、色は淡黄色。1日の排出量は成人で約1.5ℓ～2ℓ位のものである。

小便のことを以前は尿(尿)と呼んでいた。尿とは尸(尾の意)と水の合字で尻の方から流れる水のことで、これがわが国の文献に見られたのは古事記(712)で、神産みの段に⁷⁾「次於屎成神名。波邇夜須毘古神。次波邇夜須毘売神。次於尿成神名。彌都波能売神。次和久産巢日神。」……次に尿と成れる神の名は、ハニヤスヒコノカミ。次にハヤスヒメノカミ。次に尿に成れる神の名は、ミツハノメノカミ。次にワクムスビノカミ……とある。また、日本書紀(720)神代上に⁸⁾に「伊弉諾尊乃ち大樹に向ひて放屁まる。此即ち巨川に化なる」とあり、さらに同書には「伊弉冉尊、火神軻遇突智を生まんとする時に悶熱ひ懊悩む。困りて吐す。此神と化爲る。名を金山彦と曰す。次に小便まる。神と化爲る。名を罔象女と曰す。次に大便まる。神と化爲る。名を埴山媛と曰す。」⁹⁾のように大便、小便の字も見られている。

これが中世になると、尿や小便の代わりにしと、ゆばり、いばり、小用などの言葉が多く用いられるようになるのである。すなわち「和名類聚鈔」(931～938)に小用、小水が見られ、「紫式部日記」(1008)にも、「この宮の御しとに濡るはうれしきわざかな」とあり、また、「法華経玄贊」(900～1004)には「或る一分は糞を食ひ溺を飲み」とある。

さらに時代が進み江戸時代になると、小便の文字が多く出てくる。すなわち「小便を蚯蚓に仕かけ斯のてい」¹⁰⁾(1658)などのほか、安永年間(1772～1781)の今様話には「どふした、なんぞ」「なにしょんべんだ」¹¹⁾のようにしょんべんの文字が、さらに1648年の川柳には「餘寒には、しばしばししを泳えかね」¹²⁾のようにししの文字も見られている。

では、最近の女子学生は小便をどのように呼んでいるのであろうか。調査した結果は第4表の通りである。

第4表 小便の呼称

区 別	対幼児%	対同性%	対異性%
(お)シッコ	72	72	30
シ ー シ ー	11		
(お)チッコ	8		
チ ー チ ー	6		
ト イ レ		23	56
小 さ い 方		2	
未 記 入			10

註 調査者等 第1表の説明に同じ。

この表からいくつかのことが知られる。すなわち彼女らは、大便のときと同様相手によって用語を変えていること。幼児や同性に対しては(お)しっこが多用されていること。とくに最近、(お)ちっこ¹³⁾の使用が増加傾向にあることなどがそれである。

そこで、多用されているしっこ、ちっこについて考えてみる。しっこのしは湿、こは親愛の情を示す接尾語と理解され、また、ちっこのちはサ行の転訛したもの、こは記述した接尾語。つまり、尻の方から流れ出た臭う液体を美しく表現したものといえる。

さて多用の背景であるが、大きく分けて2つある。その1は、保育者が幼児の言葉の発達、すなわちサ行とタ行の発音は早くから表われ、また、サ行をシャ行、タ行をチャ行で発音しがちという特徴を先取りして子どもに語りかけてきたこと。今1つは、昭和40年代に端を発した「かわいい症候群」¹⁴⁾の出現があげられそうである。

以上大雑把に排泄語の歴史をみてきたのであるが、そんな中で、排尿促進のための音声しーしーが、尿の名称そのものに由来するほか、それが350年余の歴史とともに生きてきたこと、わけても共通の言葉にまで汎化した背景に母親たちの英知とたゆまざる努力のあったことを知った。

しかし、排泄にかかわる研究はこれで終りではない。排泄物の処理にかかわる便所、便

器、用便紙、おむつ等の問題が残っているの
で、以下これらについて一瞥しておく。

5. 便 所

大・小便を排泄および処理する場所は、長
の間廁、後架、雪隠、はばかりなどと呼ば
れていた。以下この順に、その語源あるいは
出典状況についてふれる。

廁の語源について「日本 釈 名」には、
「川の上に作りて不浄を流すゆゑにいえり」、
また「和訓栞」には、「廁の厂は崖、その崖
によせかけて作った家の屋根の形で家の側、
つまり側舎の義」とある。

ところで、古代の便所は掘った穴に2本の
板をわたしかけた程度のものであった。それ
が現在あるいは最近までのような汲取り式に
なったのは江戸時代後期のようで、そのころ
から便所のことを廁、後架、雪隠、手水、東司、
せんち、はばかり、不浄と呼ぶようになった。

後架とは、禅寺で僧堂の後にかけ渡して設
けた洗面所のことでその側に便所があり、そ
れが転じて便所となった（広辞苑）もので、
また、雪隠とは、セツインの連声で、「むか
し雪竇 禅師が浙江の雪竇山雪稔寺で廁の掃
除をつかさどった」という故事によるもので、
便所のこと（広辞苑）である。

そこで、上述した文字が見られている川柳
などを摘記すると

藪入りは 戸なき廁へ錦着て (1768)

うまい幕 茶屋の後架へぞろぞろ来 (1765)

雪隠へ 行けば両方咳ばらい (不詳)

はばかりへ 簪一本なめり川 (不詳)

釣舟へ 熔烙入れて憚り所 (1761)

大江戸でも ちと不自由な小便所 (不詳)

小用所の 杉音なしの滝にぬれ (1771)

便所にも 杉を馳走も三輪の神 (1771)

「…そして芝居へ入って西の方へ行き、梯子
の下の小便所の香がね…」 (1824)

のようである。¹⁵⁾

なお、共同便所の新設は明治に入ってからで、
「廁まんだら」¹⁶⁾によると、1864年ころ横浜の
町の辻に「往来端に立ちはだかり小便をいた
し候儀甚だ不作法至極。外国人に対し候ては
別而恥入候」なるお触れが目立つようになり、
明治4年(1871)神奈川県は「路傍便所設置」を
町会所に示達し、町の辻に公同便所(明治28
年共同便所と改称)を設置させたようである。

6. 便 器

便器は、主として幼い子や病人が使用した
もので、それにはおかわ、おまる、樋箱、尿
筒などがある。順を追って簡述する。

おかわ おまる

「静軒痴談」(時代不詳)に「便器ヲオカワ
ト云ハ小廁ノ略ナルカ。又オマルト云フ。…
…オカワハ原ケガラワシキ物ナレバ品ヲヨク
云フ。」¹⁷⁾とあり、また、他書に「おまるは
その形による」と記載されている。そして、
それは川柳などに

むつかしい医者 おかわ迄のぞくなり(1775)

しんこうに おまるおまると和尚よび(1767)

「若殿尿が出るそうじゃ。おりんどん

おまるを持ってきな」「アーイ」(1776)
などと記されている。¹⁸⁾

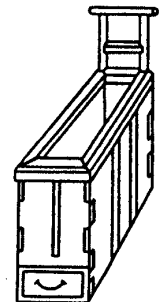
糞まる

これは次に示す樋箱
と同様女性用で、す
でに奈良時代(710~
784)上流社会で使わ
れており、はこす、清
筥、おおつぼとも呼ば
れていた。

樋 箱

樋箱¹⁹⁾は第2図の
ような形をしており、

第2図 木製樋箱



(わくから下は床下におさまる)

注：鳥居の形をしたと
ころに、袴の裾な
どをかけた。

持ち運び自由なものとして備えつけのものがあり、すでに平安時代(794~1184)から使われていた。

しびん

しびん 洩瓶ともいう。寢室に置き排尿時に用いたもので、中国や欧州では老若を問わず夜間に使用していたが、わが国では老人や病人用として用いられてきた。男性用と女性用が、また、竹製と陶器製のものがあつたが、最近ではガラス、塩化ビニール製のものが多く用いられている。

尿管

第3図 尿管

いばりつ、ゆばりつともいい、和紙に漆を塗り皮で包んだ筒(第3図参照)をいう。平安時代の貴族や僧侶が外出時に用いた。なお、一般には竹製の物が多かった。



用便紙

奈良、平安の時代は紙があまりにも高価だったことから、貴族社会でも用便紙はあまり使われなかった。が、その後徐々に使われだしたことが永録4年(1561)の「三好筑前守 義長朝臣亭江御成之記」に記されているという。

一方庶民は、室町期(1339~1573)に書かれたという「松屋筆記」²⁰⁾に記されているように「皇国山家の百姓、或は尿管を用ひ、或は藁屑、木草の葉を用て糞を拭ひ、甚だしきにいたりては尿管に繩を張りたるを跨て、摺拭もありとなん」という状況であった。このことについて川柳も²¹⁾

せっちんに 壺枚御意にかけられい(1761)

もふ藁で ふくなど信濃しかられる(1776)

形付や 江戸でも尿管で尿をふき(1771)

と詠まれている。

おしめ おむつ

乳・幼児の排泄物はおしめやおむつで処理していた。

おしめのおは名詞につけて語調を和らげる接頭語であり、次に続くしめは既述したようにしめす(湿)の略と理解される。

おむつには御襁褓の字があてられ、それは子どもの大小便をとるために腰から下に巻く布と説明されている。(広辞苑)

川柳²²⁾にも

そりゃぬいた ぬいたとしめしあてがえる (1834)

なぜおしえないよと しめし籠をだし (1834)

と記されている。

このように多用されていたおしめという言葉も最近では、おむつという言葉に、しかも、主流であった布おむつが紙おむつにとってかわられようとしている。

いうまでもなく排泄の自立は、排尿や排便後の不快を避けたいという感情要因によるところが大きい。とした場合、その目的に合致しているのは布かそれとも紙なのであろうか。筆者は布おむつの使用を是とするが、重要なことであるだけに更なる検討を願いたいとの考えから、冗長の誹りを覚悟の上で、朝日新聞に寄せられた投書の中から3篇を抽出し、提示しておく。

❖ 紙おむつの方がお尻がただれない

「赤ちゃんには布おむつを」の御意見が出ていましたが、私が2人の子どもを育てた経験では、その方がいわれるように紙おむつ即手抜きだとは思いません。

布おむつだと、皮膚にもよりましようがお尻がただれます。うちでは2人とも初めは布を使いましたが赤くただれ、紙おむつに変えたらそれがなくなりました。

その方は、紙おむつだと赤ちゃんの感情が豊かにならないようなことをいってみえますが、そんなことはありません。友だちも私と同じ意見でした。主婦 37歳 (H3.11)

❖ 布おむつ使い 良さ実感した

先日、洗濯物を干していると近所の方が、「まあ、今時布おむつなんて珍しい」と驚くように話されました。つい以前まではどの母親も当り前に布おむつを使っていたのに、今

では珍しがられる時代になったことを痛感しました。なるほど、検診などでもほとんどの赤ちゃんが紙おむつをしています。

しかし、私は自分が布おむつを使ってその良さを今、改めて実感しています。1つは経済的であること。ひとそろえすれば次の子の時も使用できます。2つめは環境にやさしいということ。紙おむつは大量のゴミが出ます。3つめに子どもの健康状態がわかりやすいということ。先日も便がいつもと違うので病院へ行くと風邪と診断されました。4つめにスキップが多いということ。1日20回以上の取り換えは大変ですが、気持ちの良さをたくさん味わせてやれます。

紙おむつの良さもたくさんあると思いますが、布おむつの良さも考えてみてください。

主婦 31歳 (H3.11)

❖ 教科書通りには育児はいきません

私は過去2年間、保育科で勉強し、布おむつを使いましょうと学びました。離乳食は家庭で作る、ミルクは母乳、哺乳瓶を使う時は必ず抱いて、とも。

私は「よし、絶対に紙おむつはやめ、離乳食は買わない。母乳でしっかり育てるぞ」と心に決めたものでした。しかし、実際、子どもを持ってみたら、母乳を飲みたがらず、哺乳瓶も抱くより寝かせて飲ます方がよく飲みました。一生懸命作った離乳食よりバラエティに富んだ既製のものを喜びました。

教科書通りの子どもは1人もいないと思います。育てていく中で、よいものを採り入れていくことが一番だと思います。

主婦 32歳 (H3.11)

あとがき

今まで排泄物をはじめ排泄をめぐる用語を検証しながら、排泄に関する現行幼児語がもつ意義を明らかにしてきた。そして、これら用語が、幼児に馴染みやすいと同時に、第三

者に不快感を与えないことを願って作られたこと。その発案者は母親であり、しかもそれは、それらの人々に育てられた子どもによって引継がれ、定着をみた世襲語であることもわかった。

ここにおいてわれわれは、用語の背景やこれら努力に思いを致し、「人類の未来であり財産である子ども」(Verny) たちの自立に力を貸し続けていかねばならない。

ところが、このごろの子どもの中には、大小便の自立はおろか排便に先立つ行動、すなわちパンツのあげおろしのできない子どもが多いと聞く。それには多くの理由があげられようが、もしそれが最近流行の「先取り症候群」の故であるとすれば、われわれの責任は重い。

上述の「先取り症候群」とは、“高い所へ” “早く” “正確に” 到達させようとして、幼少時から養育された人々が示す行動、つまり知識はあるが社会性や生活上の技術、さらには耐性に欠け、そのため自立の延期が見られる一群の人々のことをさす。

とした場合、われわれはこの事実を直視し、その改善に力をつくさねばならない。本研究の実施はもとより、紙おむつの是非をめぐる投書を取りあげた理由もここにあったのである。

なお、この研究は必然に排出器官のそれに及ぶ。幸い呼称の推移等についての整理の大半は終えた。そしてそれが、排泄物に似た経過をたどって現在に至っていることもわかった。が、今回は割愛させていただくことにした。

最後に、本研究の実施にあたり医学博士古田富久先生、本学教授 高島純先生、山田勝弘先生並びに本学図書館員各位の御指導、御支援をいただいた。紙面をかりてお礼申し上げます。

(H 7. 8. 2)

—児童教育学科・幼児教育専攻—

引 用 文 献

No	著 者	書 名	発 行 所	発 行 年
1	桜川貞雄	『トイレ考現学』	東洋機器	1986
2	平田純一	『トイレは笑う』	ToTo 出版	1990
3	倉野憲司他校注	『日本古典文学大系 古事記 祝詞』	岩波書店	1966
4	坂本太郎他校注	『日本古典文学大系 日本書紀上』	岩波書店	1967
5	小島憲之他校注	『完訳日本の古典 6万葉集五』	小学館	1986
6	薺露庵主人	『江戸の艶本と艶句を愉しむ』	三樹書房	1994
7	3に同じ			
8～9	4に同じ			
10～12	花咲一男	『江戸かわや図絵』	太平書屋	1978
13	伊藤比呂美	『良いおっばい 悪いおっばい』	集英社文庫	1992
14	増淵宗一	『かわいい症候群』	日本放送出版協会	1994
15	10に同じ			
16	李家正文	『廁 まんだら』	雪華社	1984
17～18	10に同じ			
19	2に同じ			
20～22	10に同じ			